

女性NGOによる海外教育援助(主としてアフリカ)の実態調査

大井 真理 [モーリタニア里親の会／会計]

背景・目的

今日、国境や国益を越えるあるいは現地に密着して、草の根による支援をなす国際協力組織(NGO等)の活動は、世界が様々な地球規模の課題を抱える近年において、年々その役割が注目され、評価されるようになった。しかし、紛争地帯などでの短期間の支援にマスコミの視線が集り、地味な長期間による海外教育支援などはあまり一般に知られていないのが実情でもある。このような中、北海道においては女性NGO等によるアフリカなどへの支援があり、現地での活動を長期間継続している。従って、道内にある女性グループによる海外への支援に焦点を当てると共に、教育の充実が求められている昨今において、参考となり得る資料を提示することを考慮に入れ、この実態調査を行うこととした。

内容・方法

北海道内の全ての女性国際組織(NGO等)を網羅しての実態調査は無理としても、札幌を中心活動している女性グループがあり、主としてアフリカ支援の実績を有する女性NGOに、海外教育支援活動の様子を伺い、対象国、教育を中心とする支援内容(物資支援等も含む)、派遣人員、あるいは道内における海外支援の取り組みについて調べることとした。詳細は次の通りである。
①北海道内の女性国際組織(NGO等)について海外教育支援の有無を調べる。
②海外の教育支援を行っているグループについて、対象国、援助内容、派遣人員などを教えて頂く。
③アフリカ支援を行っている女性NGOについて、教育内容、対象生徒数(児童数)、教育施設などの具体的なデータの提供をお願いする。
④上記NGOについて、対象国の政府などとの対応、現地NGOとの連携について伺い、関連して日本独自の創意工夫で現地に受け入れられたテーマがあれば教えて頂く。
⑤可能な範囲で、男性中心のグループによる海外教育支援の形態と比較して、女性グループに特有な点を見出す。

結果・成果

-結果-

調査した10グループのうち9つにおいて小冊子を作り、その活動を紹介した。特にアフリカへの海外教育支援活動を行っている女性NGOにおいては、支援に関する詳細な資料を提示してもらい、別冊の参考資料としてまとめた。

I.【女性NGOにおけるアフリカの教育支援活動の実例】

対象国は、リベリア、ルワンダ、モザンビーク、ザンビア、ガボン、モーリタニアの6カ国であった。リベリア、ルワンダ、モザンビークにおいては、いずれも内戦国であり、UNの一時停戦調停中、あるいは戦災直後の傷跡の深い地域においての支援活動であった。アフリカにおける共通の課題である貧困に起因する子供と女性の問題、エイズの蔓延に着眼し、国の未来を担う子供たちへの教育や、女性の自立援助が国の発展に繋がるとの見解から、教育支援、女性の自立援助、エイズ教育等がプロ

ジェクトとして実施されていた。

①(託児所・幼稚園／中学校・高校／職業訓練校)の建設と運営／:内戦国3カ国で実施。(教室開講はガボンで実施)多くの子供や少女達は紛争による体験からトラウマを受けており、心の交流を通じての癒しから始まり、キンシップしながら丁寧に指導している。政府の教育カリキュラムに青少年育成のためのモラル教育やエイズ教育などを盛り込み、知識の習得のみに片寄らず、内面の教育の充実を図るなど教育の向上に努めている。モザンビーク、ルワンダにおいては、政府の正式認可を得し、優良校に選ばれるなど現地のモデル校となっている。

②里親制度・奨学金支援:ルワンダ、モーリタニア、ザンビアにおいて実施。ルワンダにおいては里親が現地にて里子と対面をするツアーが実現。

③孤児院や幼稚園における教育支援:モーリタニアにおいて歌の指導に日本の童謡、紙芝居によるモラル教育に日本の物語、折り紙等を取り入れた。

④フードプロジェクト:ザンビアにおいて大豆の粉を栄養不良児に支給。リベリアにおいて難民キャンプにパンとスープを支援。

⑤その他:農業プロジェクトなど。いずれのNGOも、現地の文化や伝統を尊重すると共に、対象国の実態調査を実施して支援の方向性を決め、現地政府との連絡を頻繁に行うなど政府の理解と協力を得てプロジェクトを進めている。メンバーが継続的に現地に赴き、支援後の細かな管理、現地NGOと連携した支援などで効果をあげている。

II.【その他の海外支援の実例】

①学校建設:バングラデッシュにおける識字教育のための学校建設と運営資金援助。

②道内に在住する外国人に対する支援:対訳問診表の作成などの医療サポート・女子留学生への奨学金支援

③ピースバックプロジェクト:アフガン難民への継続的な支援

④チャリティーバザー開催:パレスチナの女性と子供たち、コソボ難民等に支援。

-成果-

本調査により、女性グループによる様々な形の海外支援の実態が明らかになった。教育支援の実例を通じて、未来を担う子供とその命を生み育てる女性の姿は国の課題を映し出す鏡であり、心身の健全性と充実のための教育を施し、知識教育とのバランスを取ることが国の復興に繋がることがわかった。教育は国の発展の鍵を握る国境を越えた共通の課題であり、様々な垣根を越えた協力と取り組みが必要とされる。また、女性NGOは、子供と女性との連帯を深めやすく、信頼を得て継続的な教育支援ができることが特有な点として挙げられた。

今後の展望

今後、国際協力への身近な窓口を紹介すると共に、アフリカの状況や、日本人が行う教育支援の効果を知らせることを通じて、自身と自國を見直すきっかけを作ることのできる資料を可能な範囲で提示し、未来を担う人々に希望を与えることに役立つことができればと願う。途上国におけるNGO活動は、そのグループ単独のものではなく、現地政府、他のNGOや専門家との交流、規模によっては国連や政府との連携がなければより良い効果をもたらすことは出来ない。世代間など様々な垣根を越えた国際協力を呼びかけたい。